



地震による産業被害などに理解を深めた

# 1次産業強靱化を

## 北大でロバスト防災シンポジウム

北大ロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点では1日、同大で農林水産業などの防災を図るロバスト防災シンポジウムを開いた。北海道胆振東部地震からの復興や森林を生かすまっすぐりなどを多岐にわたる観点から地域産業の強靱(きょうじん)化の課題を考えた。ことし4月に同大に設置した広域複合災害研究

センターの後援で開催。約80人が聴講した。瀬戸口剛同大大学院工学研究院長は「ロバストとは日本語で強靱性を指す。農林水産業づくりに災害の際は人的被害がクローズアップされがちだが、産業への被害も含め総合的な防災が必要」と道内の基幹産業である1次産業の復旧や防災・減災の取り組みの重要性を

指摘した。特別講演では昨年9月の胆振東部地震で被災した厚真町の宮坂尚市朗町長が登壇し、町の復旧・復興状況を解説。町の主力である農業について「6000畝の農地の96%を国や道の事業で営農再開できた」と早期の復興効果があつた一方で、「山林は自然治癒力だけでは50年かかる。緑化や

造林に最新技術を加えていく必要がある」と林業再生の課題も明かした。この後、大林組の大型木造建築による中山間都

市建設構想などが基調講演で語られたほか、登壇者らによる震災被害のパネルディスカッションも実施した。